日中音楽交流の半世紀

ピアニスト 瀬田裕子さん に聞く
（聞き手 谷野作太郎 元駐中国大使）

日中友好会館
JAPAN-CHINA FRIENDSHIP CENTER

― ご挨拶 ―

この冊子は、当会館顧問である谷野作太郎元駐中国大使が、著名なピアニストであり、長年にわたって音楽を通じた日中の文化交流に尽力されてきた瀬田裕子さんから伺ったお話を記録したものです。2024 年に刊行された佐藤純子さんへのインタビュー「日中文化交流の 70 年」に続き、日中文化交流の秘話第二弾とも言えるでしょう。

瀬田さんのご主人である盛中国さんも中国有数のバイオリニストであり、お二人は 1986 年に東京で知り合い、「黄金のデュオ」と評されて 30 年以上も中国を中心に世界各国で演奏活動を続けられました。この冊子の中には、お二人の出会いや中国各地を巡った演奏活動の思い出、そして音楽には国境がないという強い思いなどが具体的なエピソードとして描かれています。

残念ながら盛中国さんは 2018 年に逝去されましたが、その後も演奏活動を続けられている瀬田さんは、今でもずっとご主人が一緒にいて、音楽を通じて日中友好の懸け橋になろうと励ましてくれると述べておられます。

瀬田さんのお話は、とても心温まるものであり、また、私ども日中民間交流に従事している者にとっては、大いに勇気づけられるものでもあります。改めて、瀬田さんとインタビューの労をとられた谷野顧問に感謝申し上げます。

2025 年 9 月
日中友好会館理事長
小川正史

― 刊行に寄せて ―

長年にわたり、日本と中国の文化交流の促進に尽力されたー日本中国文化交流協会元専務理事、佐藤純子氏へのインタビューに引き続き、今回は、この方も長年、日本と中国との間にあって御主人（盛中国氏、著名なバイオリニスト。2018 年、日本政府による叙勲決定直後に惜しくも逝去）と共に音楽を通じ、中日間の文化交流の促進に尽力してこられた瀬田裕子さんへのインタビューを行いました。インタビューは前回に引き続き、在中国日本国大使館に勤務当時、盛中国、瀬田裕子ご夫妻と深いご縁をいただいた私が行いました。

盛中国、瀬田裕子ご夫妻は、日本と中国での活発な演奏活動の傍ら、日本の東北地方の大震災の折など、被災された方々への慈善活動も行なってこられました。

2012 年、中国で反日暴動が広がる中、中国のある地方で御夫妻による演奏活動の折、ピアニスト瀬田裕子さんが日本人なるが故に登壇を認められなかった時、御主人の盛中国さんが会場の聴衆に向かい、「音楽に国境なし！」と大演説をぶった。その結果、会場の拍手に迎えられ、瀬田裕子さんもピアノの前に。瀬田さんによれば、その時は、涙で譜面もかすみ…と。演奏が終わった時は、万雷の拍手。この辺りは一片の映画のシーンを見る思いです。

さまざまな分野で日中関係の事業に従事される方々の励みになればと思い、インタビューを印刷に付し、お目にかける次第です。

日中友好会館顧問
谷野作太郎

― 話者の紹介 ―

瀬田裕子

東京都生まれ。5 歳からピアノ教育を受け、国立音楽大学 器楽科 ピアノ専攻を卒業後、ヨーロッパ各地で研鑽をつむ。
帰国後、来日中のバイオリニスト盛中国氏と出会い、伴奏を務めて好評を博したことがきっかけで、生涯の伴侶となる。中国と日本の双方に演奏の拠点を置き、日中を繋ぐ架け橋として活躍。2000 年、日本外務大臣表彰を受ける。

谷野作太郎

1936 年、東京都生まれ。現在、日中友好会館顧問。
1960 年、外務省入省。第 10 代日本国駐中華人民共和国特命全権大使（1998 年 5 月～2001 年 3 月）。日中国交正常化、平和友好条約締結、平成時代の天皇皇后両陛下のご訪中など、日中外交の舞台裏に精通。

― 目　次 ―

第 1 回（2025 年 7 月 3 日）

（1）黄金のコンビ誕生秘話 …… 1

（2）名曲『梁祝』への思い …… 4

（3）文化・芸術・音楽には国境なし …… 7

第 2 回（2025 年 7 月 10 日）

（1）母なる川『黄河』 …… 10

（2）中国の音楽界とコンサート逸話 …… 13

（3）人名の読み方（日本語と中国語の違い） …… 17

（4）文化音楽交流の意義 …… 19

盛中国氏から贈られた CD

第 1 回（2025 年 7 月 3 日）

（1）黄金のコンビ誕生秘話

谷野：私が瀬田さん、そして亡くなられたご主人の盛中国さんとのご縁を得たのは、私が中国で大使をしていた時代の 1998 年から 2001 年までの間でした。当時、既にお二人は中国では大変著名な演奏家、ご主人はバイオリニスト、瀬田さんはピアニスト。ミュージックショップに行くと、お二人のいろんな CD が店に並んでいました。ここに、お二人からいただいたものをいくつかお持ちしました（冒頭写真）。その後、東日本大震災の時に今度は慈善活動、そちらでも積極的に演奏活動を通じて寄付をされた、そんなことを思い出します。

　そんなことで、日本政府としてもお二人の活動に何か応えなければ、気持ちを表さなければいけないということで、2000 年に日本外務大臣表彰を差し上げました。そしてその後、2018 年には旭日小綬章（叙勲）をご主人に差し上げたのを覚えております。しかし、その直後に急逝されて、あの時は、非常にびっくりしました。その辺りの話から、まずどうぞ。

瀬田：主人が亡くなって、もう 7 年になります。あの時、北京の大使館から連絡をいただきまして「叙勲の話がもう決まっていたことなので、しばらくお待ちください」ということでした。

　2018 年に、主人は亡くなったのですが。私は、主人が亡くなった後もずっと一緒にいると信じていまして。いろんな不思議な現象もありました。きっと主人も授与式に来ていたのではないかなと思ったりもしました。いただいた勲章を大切にし、私はその気持ちを引き継いで音楽で、いろんな人と人の心をつなぐ架け橋になりたいと思い、現在に至っております。

谷野：そうでしたか。

瀬田：主人はいつも元気いっぱい、バイタリティにあふれた人だったので。本当に急なことだったので、本人もそういうふうになるとは思わずに一生懸命に最期まで頑張っていたと思います。

谷野：このいただいたご略歴によりますと、ご主人はお若い頃、日本での音楽コンクールの審査員として来日されたとありますが。

瀬田：初来日はそうです。

谷野：そこで瀬田さんはピアニスト。バイリニストの盛中国さんとの出会いがあって。それを縁にいろんなところで二人で、デュオでリサイタルをされるようになった。日本で、そして、多くは中国でと。お二人は、どういう出会いだったのですか。

瀬田：1986 年、高円宮様がやっていらした第 3 回日本国際音楽コンクールというコンクールがありました。毎回、中国から来る人たちの成績がすごく優秀で、それで

中国からもぜひ審査員を招きたいということになり、初めて中国から審査員を招くことになりました。その年に彼は中国を代表して、日本国際音楽コンクールのバイオリン部門の審査員として来日したのです。

本当に、何と言うか不思議な縁ですね。同じマンションの私の知人が、音楽が大好きな人で、中央音楽学院に留学をしていたことがある方で揚琴という、木琴みたいな叩く楽器を学んでいらっしゃいました。それで、彼のことを非常に良く知っていまして、中国でスターのバイオリニストが今日本に来ているので、私に紹介したいからと言って、ある日突然連れてきたのです。本当にびっくりしました。それが縁ですね。

そこで最終的にはパートナーになり、30 年近く中国または国外、アメリカ、オーストラリアとかヨーロッパ、ノルウェー、北欧とかいろいろなところに行きました。

谷野：「黄金のデュオ」って言われたのだそうですね。

瀬田：ええ。当時、北京音楽庁っていう、北京の古いコンサートホールがあったのですね、今もありますが。そこのホールの館長の方が、あなたたちのコンビは「黄金のコンビ」だって、彼が言い出して。

谷野：さっきの外務大臣表彰の話に戻りますと、当時、外務大臣は河野洋平さん。たまたま、外務大臣として北京にいらっしゃる機会がありましたから。それならば、いい機会だから河野洋平大臣から直接、外務大臣表彰をお渡しいただこうと思いました。

そうしたら、実は河野洋平さんと瀬田さんの間には、本当に奇遇、奇縁があったことがわかったのですが、瀬田さんの父君は、東大の医学部の著名な先生でいらっしゃって、なんと河野洋平さんの主治医だったそうですね。大変な奇遇だなあと言ってびっくりしたのを覚えています。その後、瀬田さんは中国ではもちろんのこと、毎年東京でも演奏会をなさって、その演奏会には生前父君もいらっしゃいましたね。父君のお仲間のうちの 1 人は、大変著名な天文学者でいらっしゃる。

瀬田：日江井榮二郎さん。日江井先生です。

谷野：日江井さん。天文学で名をなした著名な方。私よりさらに高齢です。しかし、私よりはよほどお元気。もう一方、日江井先生といつも一緒にいらっしゃる方がおられますね。栗田瑞夫さん（経済界）、このお二人は瀬田さんの毎年の東京でのコンサートには必ず見えています。

瀬田：皆さん本当にお元気でお忙しくていらっしゃって。今年は残念ながら聞きに行けないとか、来年また必ず来ますとか。あの方たちは、すごく活躍をしていらっしゃる。私はお会いするたびに力をいただいています。やっぱり続けるということがすごく大切だと思います。日中の友好活動もそうですし、やはり続けていくこ

とによって自分の中でも発見があったり、思わぬところで思わぬ人が聴いてくださったりというようなことがあります。

主人と夏休みコンサートっていうシリーズをやっていまして。北京から始まったのですが、今はもう各地方に同じようなシリーズがあります。「音楽の扉を開けよう」っていうコンセプトですね、「打開音楽之門」っていう。それがまた「打開芸術之門」とかいろいろシリーズがあって。北京市のそのコンサートは、私達はもうずっと皆勤賞、毎回 2 夜連続でコンサートをしまして、本当にすごい人数が集まって。北京市からも表彰していただいたりしました。

主人はいろんな人に音楽を届けたい、音楽で力と勇気や、それからいろんなものを愛でる力というか、美しきものを美しく愛でることができるとか、そういうことを本当に大切にしていました。よく中国では「正能量」という言葉が使われるのですが、そういう力が音楽にはあるのだと言っていました。

彼自身がいろんな時代を生きてきて、1941 年生まれですから。ですから、少年の時は中華民国の時代。それから、いろんな時代を経て文化大革命にも遭い。彼は文革の話をよくしてくれました。ただ、本当にプラス思考ですよね、彼は。やっぱり全ての力は音楽から来ているのだなと実感しました。私も 30 何年間一緒にいて、本当にそういう音楽の力の薫陶を受けました。

今、自分がこれまで、それを生かしてこられたのだと思います。コロナがあっていろんな時代を経て、本当にどこにも行けないような毎日厳しい、北京に帰ったら、もうそこから出られなくなった。東京に帰ってきたら、今度は東京から帰れなくなり、ようやく東京から大連、大連で 3 週間、隔離をされて北京に戻って。それから今度は、北京から日本に戻れなくなり。それでもう、明日はどうなるかっていう状況でしたけれど、音楽のおかげで本当に心が乱れることもなく、これはいい充電の機会だからと思いながら乗り越えられました。

でも、私がそういう力を身につけられたのも、やっぱり主人と出会って、いろんなところに音楽を届けていったことから始まっています。本当に中国全土、各地。山の中みたいなところから、砂漠の中のいろんなところに行って。本当に音楽の力ってすごいのだということを実感させてもらいました。それが今の私の力になっています。

それをコンサートでは一緒に皆さまと享受できる、そういう場にしたいと思っています。それからやっぱり私と中国には縁があるので、コンサートの中には必ず中国の曲を入れるようにしています。

谷野：ご主人がお元気な頃は、東京でコンサートのあと、打ち上げということで、有志の人たちと皆で近くのレストランにくり出しましたね。

(2) 名曲『梁祝』への思い

谷野：瀬田さんの演奏会の時にいただいたプログラムの後ろのほうにご略歴がありますが、お生まれはムニャムニャ…（笑）。5 歳からピアノを始められたということのようですね。そして、その後、「黄金のコンビ」と言われたご主人とのデュオ。もう 1 つは、瀬田さんのよく演奏なされるのは、『黄河』というピアノコンチェルト。これは非常に難しい大曲です。これもいろんなところで弾いていらっしゃいますね。人民大会堂でもなさいましたね。

瀬田：はい。人民大会堂のコンサートは「盛世中国梦」といって、うちの主人の盛える、盛岡の盛に、世界の世に、中国の夢。そういうタイトルのコンサートで。彼は『梁祝』、梁山伯と祝英台の物語のコンチェルトと、それから『中国の夢』という、そのコンサートのために書き下ろした新作、それと私の『黄河』と。オーケストラは、中国国家交響楽団というナショナルオーケストラで。人民大会堂、本当にびっくりしました、あの広さは。本当に当日は地下鉄の出口は、コンサートのチケットを持っている人にしか開けませんでした。混乱するからって。やっぱり何万人の会場なので。警備もすごかったです。

谷野：盛中国さん、大変大柄な方でね。堂々とした体躯（たいく）。その後、中央交響楽団の首席バイオリニストとして。

瀬田：ソリストとしても活躍しました。

谷野：そう、ソリストの方が有名ですね。その後、中国・政治協商会議の委員もなさっていて、中国の政治の現状についていろいろお酒を飲みながら。

瀬田：主人と二人でよく政治の話もされていましたね。

谷野：いろいろと辛口のお話も伺ったことを懐かしく思い出します。バイオリン協奏曲「梁山伯と祝英台」。日本ではあまり聞く機会がないのですが。実は私が語学留学で 1960 年から 62 年まで 2 年ほど台湾にいた時に息抜きを兼ねて香港に行ったのですが。そこで見つけたのがこの『梁祝』のレコード。当時は CD とかそういうしゃれたものはなくて、ドーナツ盤のレコード。そこでこのレコードとの出会いがあり、それをこっそり台湾に持ちこんだ。

ちょうど私の下宿の同宿の人が作曲家であり、広東の人でフルートの演奏家でもあったので。何人か音楽好きが集まって部屋の窓を閉め切って、このレコードを聞いたのを思い出します。当時の台湾は、ひところのいわゆる白色テロ、蒋介石のもとでの白色テロ、共産党狩りの最盛期は過ぎていましたけれど、しかしまだ余韻が残っている、共産党に対して非常に厳しい時代でしたね。そこで窓を閉め切ってこれをみんなで聞

いたことを今でも懐かしく思い起こします。この曲について何か。

瀬田：「梁山伯と祝英台」ですか。

谷野：はい。

瀬田：本当に中国では知らない人がいないほど有名なバイオリンコンチェルトです。物語の題材は古代の男女、女性が祝英台、男性が梁山伯です。学校へ上がる年齢に、当時、女性は学校に行かれない。しかし、どうしても学校に行きたい祝英台は親にせがんで男装をして、男の子として学校に行きます。それで梁山伯と出会い、仲良しになります。卒業する時になって、祝英台は梁山伯に向かって実は自分は女の子なのだと正体を明かします。だから私はあなたのお嫁さんになれるからと自分の履いていた靴を渡して「これを私だと思って待っていてください」と。それを聞いて喜んだ梁山伯は「一緒になりましょう」と言って、その後二人はそれぞれ家に戻りますが…。

祝英台は良家の子女で、この結婚には両親から大反対されてしまいます。最終的には一緒になれなくて、最後に二人は蝶々になって飛んでいくんですね。現世では一緒になれなかったけど、2 羽のチョウになっていく、すごく美しい伝説。知らない人がいないくらいの物語です。このコンチェルト『梁祝』は、外国ではバタフライ/ラヴァーズという名前になっています。

『梁祝』（リァン ジュー）という曲は、元々オーケストラとのコンチェルト（協奏曲）です。いろんなところで演奏する時に、その曲を必ずと言っていいほどリクエストされるので、主人が 25 分ぐらいの曲を 16 分ぐらいに編曲しました。

毎回オーケストラ伴奏を連れて行くわけにもいかないし、彼自身がやっぱりみんなが聞きたい曲も入れ、皆さんが聞くべき曲も入れる、というプログラムを作るために、バイオリンコンチェルトをピアノ伴奏の曲に編曲したのです。

主人は結局プロのバイオリニストですから、彼がその曲を好きであるというよりは、中国の皆さんが彼の演奏をすごく好きで、どこへ行っても『梁祝』を弾いてくれと言われるわけです。彼自身はバイオリニストですから、毎回その曲を自分が弾かなくてもいいのでは、という気持ちはあったのでしょうけれども、是非、是非とリクエストがたくさんくるので、どうしても弾かなければならないのです。

『梁祝』の当時の伴奏譜は、今見るとボロボロになっています。夫から渡されたのは手書きの楽譜でした。どこへ行くときも必ずその楽譜を持って行くので。私も何部か作ったのですが、全てがボロボロになるぐらい、もう何回もその曲をリクエストされる。その曲なしでは私たちのコンサートにならないという感じです。それは、本人が弾きたいというよりは、本当にそれだけ皆さんの心の中にある曲と言えます。

だから、海外へコンサートに行くと、そこにいらしている中国の方たちが皆さん「思郷曲」って言いますか、自分の故郷を思う曲だと言って泣かれますよね。本

当に泣かれる。自分が国を出てきたこととか、時代とか、その当時の家族だとかいろんなことを思い出すのだと。だから、私もそのようにいろんな場面に直面して、本当に音楽の力は大きいと感じました。だから、「梁山伯と祝英台」は私にとってもすごく特別な曲になりました。

それで、主人が亡くなった後に、この曲が作曲されて 50 年だったか何か節目の年ということで、CCTV、中国中央電視台というところが記念番組を作るというお話がありました。とにかくこの曲と言えば主人なのですけれども主人が他界してしまったので、ご主人の代わりに出ていただけませんかと言われて。

しかも、その時の私はまだ立ち直れていなくて。主人が 9 月に亡くなって、その年の秋でしたから。10 月、11 月だか、そのぐらいの時期でしたね。その時私は、バイオリンの音も聞けなくて。そういう状態でしたが、やっぱりこれはやらなきゃいけないと思って。それで私は、その番組のためにピアノソロに編曲しました、その曲を。1 人で演奏できるように、主人がいなくなってしまったので。

谷野：『梁祝』のピアノ曲ね。

瀬田：はい。彼が生前オーケストラ版をピアノ伴奏版に編曲したものをもとに、1 人で弾けるようにしたのです。これをその記念番組で初めて弾いて。これ、今でもインターネット上では流れているみたいですよ。よくいろんな方がリンクを送ってくださるのですけれど。

谷野：日本では、残念ながら『梁祝』を聞く機会がありません。でも、3〜4 年前だったかな、プログラムで見つけて会場にとんで行って聞きました。演奏を聞きながら、ジーンときましたね。

それはそれとして、中国の音楽界、ここにある資料によれば建国の後の中国の音楽は、建国から文化大革命までが興隆期。バイオリン協奏曲はまさにその当時。それから「文革」で大きく停滞した時期があって。その後、「文革」の後、転換期って書いてありますけども、3 段階に分かれるということのようです。

私は「文革」の末期に北京に若い身でおりましたから、今でも思い出すんですけども。ベートーベンはじめ、西側の音楽は全てだめ。ベートーベン批判なんていうのも始まっておりましたね。それから、バレエも毛沢東さんの奥さんの。

瀬田：江青（ジャンチン）。

谷野：江青の好みの革命オペラ、バレエ一色だったのを覚えています。最近の中国は、ちょっと当時の文革の時に似ていると言う人もいますが。それは別として、私は上海に行くたびに必ず行くところがあります。上海の和平飯店の地下の、例のジャズバンド。

瀬田：お年寄りの方々のジャズバンドのところですね。

谷野：2〜3 年前ぐらいに久しぶりにあそこに行きました。この人たちは「文革」の時に皆さん追われて、そして「文革」が収まって帰って来たオールドボーイズ。私も

嬉しくなって、『何日君再来』など何曲かリクエストして聞かせていただきました。もっとも、和平飯店の方は、ど派手な、キンキラキンになって。昔の和平飯店の方が余裕の品格、趣がありましたね。

(3) 文化・芸術・音楽には国境なし

谷野：盛中国さんについて、思い出すことはいろいろありますが、別の話題になりますけども。今でも感動的な出来事を思い出します。確か、瀬田さんとお二人で中国のどこかへ行かれての演奏会。しかしあの時（2012 年）、中国では反日の運動が大変盛り上がっていた時期と重なって、結局、日本人のピアニストは舞台に出てくるなと言われ、瀬田さんは楽屋で待機させられ、舞台には上がれない。

瀬田：ホテルからも出してもらえませんでした。

谷野：そこを盛中国さんが、ひとり会場に行って、文化・音楽に国境はないと大演説をぶった。それで瀬田さんが呼び出され、瀬田さんがもう泣きながら演奏をしたという感動的なお話を伺っています。その話は、むしろ瀬田さんから伺ったほうがいいと思います。

瀬田：本当にあの時、反日のデモがすごく激しくて、全国に飛び火して反日暴動が起こった時期でした。どうしてか、日中ではそういうリズムがありますよね、時々、すごく反日のことでワーッとなる。その時のコンサートの場所は山東省の黄河が海に流れ込む東営市（ドンイン）というところで、「石油大学」っていうところでした。すごく歴史のある学校で。そこの学内のコンサートでした。私たちはもう 1 つほかのコンサートがあり、その会場から「石油大学」へ向かいましたが、他の都市では特に何か大きな問題はなかったので安心していました。

そこで東営市に入り、大学の方々が迎えに来てくださっていたので、まずはホテルに入りました。すると、すごく何か言いにくそうな態度だったので聞いてみると「実は今日の午前中に学内に停まっていた日本車が襲撃されて、ひどいことになってしまった」と。それで、「奥さまは日本人だから、やはり安全を考慮して、今日は学内には入らないでいただいたほうが良い」と言われました。「学内に入らなくて、どうやってコンサートをするのですか」と聞いたら、「学内にピアノを弾ける子がいるので、ご主人の伴奏ができるように用意してあります」と。そんなこと言われても、突然演奏ができるものではありません。主人はとにかく、私には「分かった」とだけ言うので、彼に言われるがままにしました。

それで学校の女性の先生が、私には「今日はホテルから動かないでください」と言って、私が泣いているものですから付き添ってくれて「気を落とさないで」と言われました。主人の方は「ちょっと行ってくる」とだけ言って、学校に行ったんです。私はホテルの部屋でずっと泣いていました。

それで、その先生といろいろ話したりして。先生も「すごくお気持ちは分かります」とかいろいろ話していたら、私の携帯が鳴って。主人からでした。「どうしたの」って言ったら「とにかくすぐ学校から迎えが行くので、今すぐ来い」と言われて。え、何しに行くのだろうと思ったのですが、「とにかくコンサートに必要なものを全部持ってすぐ来い」って言われました。それで、その先生も意味がよく分からず、「とりあえず準備をしましょう」と急いで迎えの車に乗って大学に向かいました。

そして、大学に着いたらまずは警備員さんがたくさんいて、ものすごい警備でした。やっぱり日本車が壊されたり、他にもいろいろあったりして暴動にならないかっていう心配があって。でももう警察官から警備の方から、その人たちがみんな拍手をしています。でもどうして拍手をしているのかがよく分からない。会場に着いたら、みんなが拍手している。「とにかく早く着替えて舞台に出てください」って言われて、主人はそこに立っていて「早く、早く」って言う。「出てって何するの」って言ったら「君のピアノソロも含めて普通のコンサートだ」と言うのです。「え、ピアノソロ弾けるんですか、今日」って言ってステージの上を見たら、舞台に出ても、ピアノのふたは閉まったままです。鍵盤も見えない状態で。

コンサートの前半は、いつも私のピアノソロから始まります。そのパターンは彼が考えたのですけれど、ピアノソロが前半、バイオリンソロが後半のコンサートです。

彼は先に大学に入って、会場の人に説明したようです。「今ここにピアノがある。しかし、これを弾く予定だった人は今、ホテルの部屋で泣いています。どこの国にも良い人もいれば悪い人もいる。いろんな考えの人がいる。だけれども、今ホテルで泣いている日本人は、本当に心から中国を愛し、音楽を愛し、皆さんと今日ここで音楽を一緒に楽しむ、演奏をするために努力を重ねてきた人です。ですから、その人をもし歓迎するのであれば、皆さん拍手でその気持ちを表してください」と。

彼は事前に学校の校長先生とか関係者に釘を刺されていたわけです「絶対に私（日本人）の話題を舞台では出さないように」と。けれど大学まで歩いて行って、彼は真っ先に会場でその話をしました。

だから、ピアノのふたも閉まっているままでしたけれど、その彼の演説の後から会場に拍手が起こり、それが鳴り止まなかったのです。私が着くまで何十分間も皆さん、後から「手が痛くなりました」って言っていましたけれど。それで、ピアノのふたが、おもむろに開けられて、もう私は泣きながら弾いて。後半の彼のバイオリンのソロも終わって、もちろん暴動も何もなくコンサートは大成功でした。最後に大学の学生たちがステージに上がってきて、日本語で「実は私たちはみんな日本を大好きです」と。もうみんなで抱き合って泣きました。

谷野：まさに映画のワンシーンのような。

瀬田：そう。だから、映像があったら NHK でも流したいって言われました。

谷野：最後はもう万雷の拍手で終わったようですね。

瀬田：そうです。結局、私を迎える前から拍手で、最後も拍手で。だから、本当にその映像が残っていたらぜひ流したいっていうふうに言われました。振り返れば私の中でも、いろんな反日の場面に遭遇しました。けれど、あれが一番大きな出来事でしたね。この出来事で結構勇気づけられましたし、本当の真心と愛があれば。愛って男女だけではないと思います。人間を愛す、地球を愛す。全て、そういうものがあれば通じ合えないことはないと思います。

私が中国で 30 何年間活動をしてきた中で本当に思うのは、中国の人たちはとっても心が大きくて、いつも温かく迎えてくれる。タクシーに乗っても結構話好きな人が多いですね。それで耳が良くて、こちらが話す中国語の発音を聞いて「どこの地方の人？」みたいな。それで「日本人よ」って答えると、驚いて「実は僕、日本が一番嫌いだ」とか言いながらも、話しているうちに「いや、今日から日本のことを好きになったかもしれない」とか言われたりして（笑）。

ある時など、談義をし過ぎて曲がるべきところでも曲がらず、それで、トランクの中の私の荷物を出すのも忘れ、私も自分の荷物を忘れて家に帰ってきてしまった。「わあ！全部荷物忘れてきた」と気がついて。そうしたら、夕方になって我が家があるマンションの警備室から電話があって「ここにタクシー運転手が来ていて、どうも話を聞いているとあなたのことじゃないかと思いますが、日本人との話に熱中していたら荷物を忘れたので届けに来ましたって言っています。身に覚えがありますか」って。それで届けていただいたりして。そんないろんな日常の出来事もあります。

谷野：とにかく、文化、芸術、音楽には国境なし。

瀬田：そうですね。

谷野：大変感動的なお話ですね。今日はこのぐらいにしておきましょうか。もう 1 回お時間をいただいて、続きのお話をうかがいたいと思います。

第 2 回（2025 年 7 月 10 日）

（1）母なる川『黄河』

谷野：暑いところをご足労いただいてありがとうございます。前回はずいぶん「梁山伯と祝英台」バイオリン協奏曲の話を二人でさせていただきましたが、今日、伺いたかったのは、今回は中国でもう 1 つ大変有名な今度は、ピアノ協奏曲『黄河』（ホワンホー）についてうかがいます。

瀬田：はい。『黄河』。

谷野：せっかくの機会ですから。これも日本では残念ながらあまり知られてない曲です。中国では大変有名な協奏曲ですよね。「抗日」がテーマになっている壮大な協奏曲。瀬田さんは人民大会堂で。

瀬田：そうです、人民大会堂で弾きました。

谷野：この曲について、少しお話しいただけますか。

瀬田：まずは、「黄河」というモチーフは中国の人たちが自国の中華文明を称える、その思いがすごく込められている曲ですね。特に第二楽章は祖国への強い思い、それを誇らしく敬い、称えるような気持ちです。最初に私にその曲を弾いたらどうかと言ってくれたのは主人です。「日本人である君が弾くことにすごく意義がある」と思うと。何がっていうよりも、とにかくちょっと音を出してみたらどうだろうかと言うので楽譜をもらって見てみました。他にも文革の時代の楽譜をくださった方のものを見ると「抗日」の文字がたくさん書いてあったりするわけですね。

私は戦争後の生まれだし、その重みというか、いったい私が弾くことでどういうことができるのだろうかという思いがありました。その重みに耐えられるのだろうかという不安などもあり、いろんな意味で非常に悩みました。でも楽譜を見て音を追っていくうちに、それが中国の文明、何千年の歴史ですよね、それを称えるような本当に素晴らしい曲だということがわかって。

それも、作曲が文革中という特殊な時代に、作曲をするにあたって中国中央楽団という、今のナショナルオーケストラ、中国国家交響楽団の前身である楽団がありまして、そこに作曲家だのソリストだの、音楽会の優秀な人たちはみんな集合していたと言っても過言ではないぐらいでした。器楽の関係の方です。その中で創作団のようなチームを作り、何人かで一緒に創作していたそうです。だから、その時代の英知が結集されているわけです。そういう意味でも、曲としてすごく良く書けている。なかなかあの曲を超える、『梁山伯と祝英台』もそうですが、中国でも新しい作曲家がたくさんいらっしゃいますが、あの曲を超えていく中国全土知らない人がいない、というような曲は出ていない。ある時代である種の才

能は止まってしまっていますよね。

ですから、どこの国でもある問題ですけれども。何と言うか、主人なんかは、近現代の音楽ももちろん探索していかなければいけないのだけれども、音楽がだんだん何だか宇宙人が書いた言葉みたいになってしまった。要するに、ポンと心に響くメロディーが浮かんで、自分にすごく近い、生活に近い、親近感のある、エネルギーが湧くというようなタイプの曲が生まれてこなくなってしまったと思います。

だから、梁山伯と祝英台のバイオリン協奏曲『梁祝』と、ピアノコンチェルトの『黄河』は、本当に大きな意味で中国の近現代音楽を代表する曲です。どちらもやはり文学の影響があって、その時代の多くの才能が一緒になって、ある意味で特殊な環境下で、一致団結して１つの大きな曲を書いた。今ではなかなか得られない、その作曲環境と言いますか、それが名曲を残した１つの要因ではないかと思います。

『黄河』のコンチェルトに関しては、私は弾きながら、本当にいい曲だなということがまずあって。それが最初にあったので、やっぱり弾いていこうと思ったんですね。私の中には先週もお話ししたように、「黄河」というのは中国の人民にとって母なる川、母親河（ムーチンホー）と言われています。だったら、私たち日本人にも中国の文明が日本に流れてきて、それを取り入れ昇華されて大和民族の文化となり、漢字が仮名になりという、そういう美しい流れがあります。しかし、ルーツは中国にある。

私も中国で暮らしていると、この熟語、これは中国の古い文学からきたんだと気づきもたくさんあります。自分の中で、子どもの時から祖母がお茶をやったり、祖父が漢詩を書いたりっていう、その環境から、すごくそういう文明に惹かれている部分があって、それが「黄河」と重なったようです。私も中国の文明を受け継いだ日本人として、母なる川である「黄河」を、親近感を込めて「祖母なる川」と呼ばせてもらいたいなと思います。本当にそういう気持ちが湧いてくる曲です。確かに勇敢な部分はあります。戦争のこともありますから。

ですが、今も世界のいろんなところで戦争がある中、失ってはいけない尊いものを大切にしていかなければいけないということをあらためて感じます。私はこれを訴えていきたいと思って。そうすれば、私が『黄河』を弾くことにも意義がありますし、やはり日中友好とか一言で簡単に言いますけれど、多くの方たちの積み重ねがあって今がある。両国のいろんな方々が努力されてきた。そのことに気付くのがとても大変ですけれど、モノって作るのは本当に大変。信頼関係も一歩一歩つながって。でも、それが壊れてしまう時って、本当にあっという間に音を立てて崩れてしまう。だからこそ、私も一般市民ですけど、本当に小さなことから一生懸命やっていきたいなという、そういう多くの力が集まって大きな友好

という環境ができてくる、という思いがあります。

それで、中国という国で 30 何年過ごしてきて、自分が日本で育った年月と、向こうで育てていただいたというか、お世話になった年月とがだんだん同じくらいか増えてくる年になってきました。本当に心からこの二国が友好であってほしいというのが亡き主人の思いでもあり、私がそれを引き継いで、力のある限りやっていくべきことだと思っています。

やることがあるというのがどれだけありがたいことか。本当に多くの方々に支えられて。谷野大使もそうです、四六時中お会いしてお話しするわけではないですけれども、いつも心の中に応援してくださっている方があるというお顔が浮かび、それが演奏をしていくという力になっています。音楽には本当にそういう力があると思います。

ですから、私の『黄河』のコンチェルトの演奏というのは、ほかのピアニストとは違う思い入れや解釈がありますし、そういうものがあっても良いというのが音楽の幅というんですかね。それぞれにその人の考えや歴史やいろんなものがあり、そこがかみ合わさって 1 つの音となり、それがまた聞いてくださる方に空気の振動として伝わっている。その中で少しでも私の思いを伝えられたらと思っています。

中国では本当にいろんなところで弾かせていただきましたし、単独ソロで第二楽章はよく演奏もさせていただきます。オーストラリアでも演奏しました。本当に中国の方たちにとって『梁祝』、それから『黄河』のコンチェルト、特別な思い入れがあると思いますね。日本の方々が海外にいらっしゃって、いろんな機会に日本のメロディーだの日本語に接するあの喜びというか、懐かしさというか、心強さというか。中国の方たちにとっても、それは「思郷曲」であり、ノスタルジックなとても思い入れの強い曲だと思います。

背景としてもちろん「抗日」があると言いますけれど、それは 1 つのテーマであって。しかし、この曲は、その時代の英知の結集であり、本当に美しい曲なので、ぜひ日本でもこの思いを聞いていただきたいなと思います。

私としては、日本の国内で中国のオーケストラと一緒にこの曲を演奏できたらいいなというのがすごく大きな夢です。

谷野：お話を伺うと、「黄河」は中国の人たちにとって、インドにおけるガンジス川のような存在なのですね、恐らく。母なる川、黄河。

瀬田：はい。結局、水のあるところに人がいて文化が生まれ。文明が発展し、というような大きな物語ですね。

(2) 中国の音楽界とコンサート逸話

谷野：「抗日」が 1 つのテーマ、背景にあるということですが、もう 1 つはよく耳にする中国の、中華人民共和国の国歌ですね。義勇軍行進曲。中国語では「行進曲」って言わずに「進行曲」って言うようですけど。私がちょっと聞きかじった、勉強したことをご紹介すると、この歌詞を付けたのは田漢（ティエンハン）という人。しかしあれは本来、ある映画の主題曲だったようですね。

瀬田：そうなのですね。

谷野：それを新中国になってから、政府がこれを中華人民共和国の国歌として制定したという経緯があるようです。ティエンハンという人は、モノの本によれば、文革のときに散々に傷めつけられて獄死。かなり長命であられたようですけど、最後は痛ましい。他方、これに曲を付けたのは聶耳（ニエアル）。

瀬田：国歌の作曲家ですね。

谷野：ティエンハンさんもニエアルさんも、日本留学なのですね。

瀬田：そう。日本にゆかりがある。

谷野：聶耳さんは 1935 年生まれですけども、短期間日本に留学していて。ところが、この人は 25 歳で急逝されたようです。だから、自分の作曲した曲が中華人民共和国の国歌になるということを知らないまま。私がこの話を聞いたのは、ティエンハンさんの姪御さんの田偉（ティエンウェイ）さん。この方は舞台俳優、舞台芸術家として多方面の活動を日本でしておられて。この方からその話を伺い、ご本もいただきました。

　ティエンハンともう一人の李大釗（リーダージャオ）、共産党を造った人がいまして、彼女自身がこれを主題にした一幕劇を演じておられました。私は、2021 年の中国共産党 100 周年の時に、その舞台を東京で拝見したことがあります。こうやってみると、いろんな人が日本にご縁があったんですね。

瀬田：そうですね。結構いろんなところで革命家であられた方とか、清朝の時代とか、日本に亡命された方もかなりいらっしゃいますよね。

谷野：それで、瀬田さんはもちろん、いろいろお話しにあったことも含めて、中国各地でご主人と共に活発に演奏旅行をされておられた。

　私も大使としていろんなところに伺う機会がありましたが、なかなか公務で忙しくて、いわゆる観光地には当時、ほとんど行けなかったという残念な思いがあります。瀬田さんは青海省にもいらっしゃった。

瀬田：はい。行きました。

谷野：青海省は行けなかった省の 1 つです。本当にうらやましい限りで。

瀬田：私たちもコンサートで行くので、いつも主人が楽器を持っていますし、とにかく飛行場からホテル、ホテルへ行ったらコンサート会場へ行って、それから子ども

たちを教えるなど公開レッスンがあり、その他いろいろ、大学訪問に行くとか。

それで、合間を縫って、いつも必ず行くのは主人が大好きな博物館。現地の博物館は外さない。結構わがままを言って、開いてない時間も開けてくださったりして見せていただいたこともあります。それで大体帰る時は皆さんが口をそろえて「残って」とおっしゃいますが、主人は必ずそこでは残らない。1 つは、残ってだらだらしていると、やっぱり皆さんがもてなして下さるのに気も使われるし、お時間も使われるし、というのがあって。

谷野：私は若いころ、北京の大使館に勤務していました。毛沢東さんの末期の頃ですが、1973 年から 5 年頃だったかな。この時はもう、上海に行くのですらいちいち外交部の許可がいる頃で。しかも、その許可がなかなか下りないという時代。あの当時は中国の国内旅行はままならなかった。

次に、中国の現在の音楽界の現状について、ちょっとお話を伺えればと思います。私は門外漢ですけども、有名なのは中国の中央音楽学院、それと上海音楽学院。

瀬田：そこが 2 大音楽学院ですね。北と南の。

谷野：トップですね。今でもそう？

瀬田：そうですね。

谷野：大使として北京に勤務していた時、中央音楽学院に伺ったことは覚えています。

瀬田：やはり中央音楽学院と上海音楽学院というのが中国国内の 2 大音楽学院、北と南の代表という感じで。でも今、10 大音楽学院っていうのがあるのだと思います。各地の音楽学院も海外に出られて帰って来た方々とか、そういう教える方々のレベルも高くなりました。元々、演奏レベルはとっても高かったのですが。それから、やはり才能のある子があの国はすごく多いですね。ですから、全国に 10 校ぐらい、良い音楽学校があります。

この間、浙江省の浙江音楽学院というところでマスタークラスをさせていただいて、ピアノ科の子たち、みんな本当に良く弾きます。それから、西安音楽学院というのがありまして、そこも歴史のある素晴らしい学校で。西安の調律師で素晴らしい方がいらして。全くの無名ですけれども、もうお亡くなりになったと思います。

私がその昔付いていた桐朋学園大学の講師、森安耀子（もりやすようこ）先生をお連れして、1990 年前後に一緒に西安音楽学院に行って公開レッスンをしました。彼女のマスタークラスで公開レッスンがあって、あまりにも生徒のレベルが高くて驚きました。でも彼女は全くそれを予想していなかったわけです。行ってみたら、あまりにも西安の子たちがバリバリ弾くもので。ご自分のリサイタルの時には本当に緊張されていました。

こんなエピソードもあります。舞台に靴を履かないで出ようとしたのです。私

が先生のパンプスを持って追っかけて、「先生、靴が、靴が、まだ靴を履いていませんよ」って出て行って。その先生が慌てるぐらい、弾ける方たちが本当に多い。私がこの間、浙江の音楽学院に行っても思いました。国際コンクールにバンバン行く子たちも増えています。

谷野：そうですか。

瀬田：それから、今、とにかく中国でコンサートをする外来のアーティストが昔に比べたらやっぱり増えています。最初に主人に連れられて南のほうに行ったことがあります。南のほうが当時は開けていたほうなのです。鄧小平副主席の改革開放政策っていうのが始まって、南のほうから発展が始まりました。南には深圳、広州とか、それから珠海というところがあります。

珠海は今でこそなかなか大きな都市になりましたけど、当時、私たちが行ったのは 1987、8 年。とにかく新しい都市として整備したばっかり。人はあまり居ませんでした。当時から見れば道も広かった。今、見たらとても狭いのですけれど。

それで、コンサートに行きましたが、グランドピアノがない。もちろん、コンサートホールもない。それで、そこは、昔のフィルム映画をやるような、舞台をやるような、何でもやるような公会堂、そういう感じです。日本で言うと。そういうところでコンサートをしました。地方でも公演が少なくありませんでした。

とにかく置かれてあるピアノもアップライトで。かつ、調律の方が調律をされているはずなのですが、音が合わないのです。バイオリンは彼の耳で音程ができていますけれど、私の場合はピアノで音程を作ってもらって弾きます。ところがズレズレ。もうどうしましょうっていうぐらい大変で。終わった後、珠海市政府の方々、党の方々、珠海市秘書長の方とかいろんな方が主人をもてなしてくれて、打ち上げじゃないですけど。その時に私は、やっぱり自分が遠くまで来て、あまりにも演奏が思い通りにならなかったので、泣いてしまったのですね。そうしたら、その秘書長の方が「この次にお呼びする時にはグランドピアノを用意しておきます」とおっしゃったのです。それに今回、演奏は素晴らしかったし、みんな喜んでいます、と。

その時に私、思いました。主人はモスクワ音楽学院という本当に当時世界の超一流の音楽環境にいた人です。だけれど、彼も「文革」を通して音楽は人民のものでなければいけないということを骨身に染みて思ったのです。ですから、横でずっと 30 何年間一緒に過ごして演奏してきて、本当に薫陶されました。やっぱり音楽の前では、私たちは音楽におけるしもべであって、音楽から私たちも力をもらい、それを皆さんと分け合うのだと。

それから私のコンサートに対する考え方もだんだん変わっていきました。コンサートホールがないならば、私が行って演奏することで、そこが一流のコンサートホールのようになる。そのぐらい音楽を、感動を表せるように自分の技量を上

げていくということが一番大事だと気が付きました。やはり世界で何が起こるか分からない。地震が起きればコンサートホールだって一瞬にして瓦礫になってしまうかもしれない。だけど、その瓦礫の中でもやらなければいけないことが人間にはあって。こうじゃなければできません、ああじゃなければできませんっていうのは、本当は間違っていたのだということも、私はその時から学んだのですね。

でも、翌年、1年後にまた呼んでくださって。その時にはヤマハのグランドピアノがありました。セカンドよりももっと中古でしたけど、でも、ヤマハのグランドピアノでした。きちんと調律されていましたし。中国の方はそういうハートがある。本当に私は嬉しかったです。

谷野：今、あれですね。中国ではいわゆる二胡とか古箏の曲とか、西洋音楽と共に民族音楽。

瀬田：そうですね。今すごく民族音楽が盛んです。

谷野：民族音楽の器楽の研究、演奏が盛んですね。

瀬田：そうですね。やはり習近平国家主席が中国の音楽をすごく重視されていらっしゃるというのもあります。中国音楽学院っていうのが前からありましたが、今本当に設備も教授陣もすごく整っています。

谷野：瀬田さんの、盛中国さんのアンコールなんかで、よく楽しみだったのは『新疆の春』、牧歌といった中国の地方の小曲。

瀬田：はい。アンコールではいつもそういった曲を二人で弾いていました。

谷野：いいですね、あれ。

瀬田：ところで、反日の運動が強い時に、呉儀（ゴギ）副首相が日本に見えて。その時の大使は王毅大使。今の外務大臣、外交部長でいらっしゃる王毅大使で。王毅大使が駐日大使をされている時に、主人と私も日本に来ていたので。私たちのコンサートの前ぐらいの日に、公邸でお食事会をしましょうっていうことになり伺ったことがあります。そこに呉儀副首相も見えるはずだったのですが、何かで、日本にいらしてからすぐに北京に帰ってしまったことがありました。途中で帰っちゃったか、来られなくなっちゃったっていう。

谷野：何かあった。あの時は具体的には思い出せませんが。

瀬田：そう。急なことだったと思います。でも、晩餐会はやりました、食事会は。そして、王毅大使が、あなたたちのコンサートは、盛先生のコンサートは、何があっても僕は伺います。それで、本当にいらっしゃいました。あの時は、谷野大使もいらしてくださっていたのです。

谷野：そうでしたか。

瀬田：はい。会場は紀尾井ホールでした。それで、主人のリサイタルで、最後にアンコールで『新疆の春』を弾きました。それで「日中の関係は冬の時もあればいろんな季節があると。だけど、冬があれば必ずいつか春が来ると。だから、雪解けも

間近。その祈りを込めて。そして、今日は谷野大使と王毅大使がここに来てくださっていらっしゃいます」と言って、舞台から挨拶をすると、二人ともお立ちになられました。そうです。王毅大使もお立ちになりました。それで、すごい拍手。そこで主人は『新疆の春』を演奏しました、春の訪れを祈って。

(3) 人名の読み方（日本語と中国語の違い）

谷野：別のテーマで、私が兼ねてから思っていることがあります。瀬田さんは、中国語ではライティエン。

瀬田：はい。ライティエン/ユウズです。

谷野：私はグーイエ。

瀬田：グーイエですね。

谷野：1 回だけ間違われたことがありました。1 回だけね、グーイエって、古い（グー）と同じ発音だから。

瀬田：古と、谷と発音が。

谷野：そこで、席上の名札が「古野大使」と（笑）。ただの 1 回だけでしたね。けれども「違うよ、シャングーのグーだ。山谷の谷だ」と言って、大笑いしたのを覚えています。

　私の年来の主張ですけれども、日本においてやっぱり中国の人たちの姓名は本来の呼び名で呼ぶべきだと。周恩来（シュウオンライ）なんて言わないで、ジョウエンライと言うべき。最近一部の新聞はルビを振ったりしておりますけれども。それから、北京（ベイジン）をペキンなんて言っているのは日本だけですよね。ベイジン。もっとも、上海、シャンハイは国際的にも有名な都市だから、シャンハイはシャンハイ。

瀬田：そうですね。どうしてシャンハイだけはシャンハイなのでしょう。

谷野：梅蘭芳も国際的な有名な舞台俳優なので、メイランファン。しかし、いずれにせよ中国では瀬田（セタ）さん、谷野（タニノ）さん、と呼んでほしい、日本ではシュウオンライって言わないでジョウエンライ。習近平、シュウキンペイと言わないで、シージンピン。しかし、これがなかなか難しい。

瀬田：難しいですね。

谷野：台湾ではボポモホ（注音符号）っていう、日本の片仮名みたいなものがあるから、これで読むと読みやすいです。

瀬田：そうですね。主人が CD を出す時に、やはり読みをどうするかと。盛中国（セイチュウゴク）さんでは、中国の人には誰か分からないですよねって言われて。発音があまりにもかけ離れていますねって。

谷野：盛中国（ションジョングオ）ですね。

瀬田：それで、カタカナでルビを振ることになったのですが、それが読みにくいということになって、やっぱりどうしたらいいのだろうかというところで、先に進みませんでした。

谷野：ションジョングオ。韓国では既にもう本来の読みになっているのですよ。これはハングルがあるから。タニノ、セタと、ハングルでちゃんと書けるのです。しかし昔は、金大中（キンダイチュウ）なんて言っていましたね。

瀬田：そうですね。

谷野：彼は私の古くからの友人でした。ところが最近は。

瀬田：キムデジュン。

谷野：大統領をした盧泰愚さんはノテウ。あれも、あえて日本流に読めばロタイグなのですけど。ロタイグなんて、誰のこととなるでしょう。日本ではすっかり韓国での読み方が定着しましたね。最近の例で言えば、尹錫悦（ユンソンニョル）。日中間でも早くそうなってほしい。

瀬田：そうですね。

谷野：今度大統領になった、李在明（イジェミョン）でしょう。リザイメイなんて言わない。イジェミョン。

瀬田：そうですね。韓国の方は、カタカナでふりがな。漢字では出てこないんですよね。中国の方のお名前は漢字でテロップというか、漢字だからどうしても。

谷野：ワシントンで例えば、日中で外相会談やるでしょう。その際の通訳は、中国側はアメリカンサービスの人。でも、日中首脳会談、外相会談をすると、やっぱり日本人の政治家の名前が出てくる。だから、中国外交部の英語サービスの人でも今は少なくとも日本の政治家の氏名ぐらいは一生懸命に日本語読みを勉強している。シャオチュアン チュンイーランと中国側の外相が言っても、それはコイズミジュンイチロウ（小泉純一郎）のことだなと。そのぐらいの勉強はしているようですが、なかなかまあ、言うは易しく、やるのは難しいのですね。だけど、本来の呼び名で呼び合えるようになるのが自然だと思います。そういうちょっとしたことですよね。

傑作なのは、外務省の後輩で畠中君という人がいます。畠って白に田んぼの田。あの字は中国語の漢字にない。だから、あえて下の田んぼの田を取って、田中（ティエンジョン）、ティエンジョンって言っていました。そんなことを思い出します。

瀬田：私も演奏会で行くじゃないですか。なぜかだんだん変化球が…。ライティエンユウズのはずなのですが、どこからか田中裕子（タナカユウコ）になったことがあります。通訳の方から「タナカユウコのユウコだって同じ字です」と言われても全く本人とは違いますよね。

以前、地方のコンサートでご紹介いただいた時に「こちらがピアニストで夫人

の…」から言い出して、その司会の方が私をじっと見て、瀬田裕子（ライティエンユウズ）と言う名前が全然出てこなくなっちゃって。「こちらは田中裕子（ティエンジョンユウズ）です」って言うのです。違いますよね。「あなたがあの有名な田中裕子さんですか！」とか言われて会場がどよめいて。全然違うのに「彼女は俳優もやるし、ピアノも弾くんです！」と紹介されて。なんかおかしいぞって。そういう笑い話もあるし。

それともう一つ、ユウっていうのはユタカ、余裕のユウですけど、中国では玉の字もユーって言いますよね。そうすると、裕と玉の字が混同されて。河南省に行ったときに南陽（ナンヤン）っていうところがありますが、そこは玉器の産地です。そしたら、プログラムにある私の名前がもう全部「裕子」ではなくて、全部ギョクの子ども「玉子」になっていて。主人が「これ、日本ではギョクではなくて鶏蛋（ジーダン、卵の意味）になる。卵だよ、これでは！」と言って。本当に笑い話がいっぱいあります、名前に関しては、本当にもう。

谷野：それは面白いですね。先程、和成漢字の例として「畠」という文字の話をしましたが、この外にも峠、辻、栃、畑、込等々、いくつかありますね。これらは中国語でどのように読んでいるのでしょうね。ところで…

（4）文化音楽交流の意義

谷野：最後に、今後の日中、中日の関係の中で、瀬田さんご夫妻が活発に展開された文化、音楽交流の意義、その話を伺って本インタビューの締めといたしたいと思います。

瀬田：音楽っていうのは、メロディー、旋律であり、音っていうのは全て空気の振動で伝わりますね。ですから、取材などで「現代はインターネットがとても発達していますけれど、生のコンサートに行く人が減っていくことになり、そういうことに危惧感はないですか」と、よく聞かれるのですが。

私、メディアで CD などいろんな方法で音楽を聴いたり、いろんな音楽に触れたりする機会があるのはすごく良いことだと思います。それで興味が湧いて、でも、実際に生で聞くものと、インターネットを通して見るものとは、その感動が実際違います。空気が振動してそこに一緒にいる。だから、いらっしゃる方、聴いてくださっている方の呼吸も、そこの音楽を奏でるところに参加しているわけです。だから、臨場感がものすごくあって、私はそういうものを大切にしたいと思っています。

1 人の音楽家、演奏家としていつも心がけているのは、やはり音楽によって、言葉を超えたつながり、響き合い、共鳴するということですね。空気が振動して、皆さんの 1 つ 1 つの細胞も振動して、私の細胞も振動して。そして、そこに思い

を込めて書いてくれた歴代の作曲家たちの思いや思想。そういうものを全部ミックスして、感動が生まれる。それが本当に良い意味で大きな力になる。

実際にはうまくいかない、いろいろなシビアなこともあります。例えば政治、私たちなんかはもう全くの素人で、やはり政治とか外交とかっていうのはプロの領域で。やっぱりその専門の領域がある。そこには本当にいろんなものがあり、もちろん知恵も必要だし。でも、過去の歴史を見ても、何かの空気の動きで、何かの振動で、何かで心が動いて、大きな歴史の転換というか決断があったり、交流があったり、ということがあったと思います。

それから、音楽というものは皆さまの心をいつも振動させています。音楽はどうしても無機質になりがちな今の世の中で、いろいろな環境そして手段で簡単に触れることが出来てしまうから、すっかりわかったつもりになっている。でもそれは、ちょっと浅くて、自分の身を伴っていないし、血も通っていない。でも、皆さまの心を振動させられる、そういうものがあるのですよということを、生の演奏を通じて知っていただきたい。それでクラッシック音楽に興味を持っていただきたい。

私の拙い気持ち、拙い演奏ではありますけれども、やっぱり私の心の中にここまで日中関係を支えてこられた皆さまの、多くの多くの方たちの気持ちもあるわけです。もちろん私の主人も含めて。ですから、それを少しでも音として、そこで魂を込めてやっていれば、何か皆さまの心の琴線に響いて、それが思わぬ心の動きにつながっていけばいいなと思って。それを念じて、日々精進しております。

スポーツでも何でも、最終的には精神力だと思います。だから、もちろんテクニックも必要、スキルも必要。だけれども、その根本にあるのは人としての愛とか温かみとか許容とか、大きなものですね。そういうものって目には見えないのですが、何かで人に伝わっていくものだと思います。それで、お互いがそこに愛を持てるように、お互いを尊重できるように。やはり尊敬していただくためには相手も尊敬しなければいけないし、実はそういうものを音で表現できるのだなという可能性を、私はこの年になって初めて感じています。本当に 60 歳以上になってからですね。

コロナという地球的な危機にも見舞われて考えたこともたくさんあります。でも、どんな状況の中でも前に進んで行かなければいけない。そういう前に進んで行く力、今までを作ってくださった方々、これからを支えてくれる人たち、若い人たちの中にはまだ子ども、赤ちゃんでも音楽は通じると思います。何か心地良い、よし、何か元気をもらった、勇気をもらった、何か優しくなった。そういう目に見えない力をこれからも信じて。本当にピュアな気持ちで、年を取れば取るほどピュアになって、知恵を付けていければなと思います。

若い時って自分にパワーもありますし、いろいろな好条件もあります。でも、

年齢を経ていくと、人のいろんな気持ちが分かったり、生まれたばかりの子どもを見るとやっぱり愛おしいなって思ったりします。この子たちが元気に育って、その人類も動物と同じですから、いつ絶滅危惧種になってしまうか分からないですよね。ですから、みんなで知恵を出し合いながら、環境にも優しくするし、交流して共鳴する。そういうことができる能力というのは人間だけが持つ１つの特徴だと思います。

コンサートでもお話しさせていただくのですが、喜怒哀楽や母性愛っていうのは、動物にもたくさんあります。でも、それを昇華させて英知にして、次世代につないでいく、そういう知恵みたいな。昇華させていくことは人類にしかできないと私は思います。目と目を見つめ合って交流するとか、そういう人間らしい、せっかくここまで発展してきたものを、音楽という素晴らしい、言葉より雄弁なものによって大きなものへとつないでいけたらいいなと思っています。

そんな中で、私の中で、日本と中国の関係は、とってもとっても大事にしているものです。だから、主人の思いも受け継ぎ、多くの先人の方々のお力をいただいて、感謝の気持ちを込めながら、これからも精進していきたいと思います。

谷野：素晴らしいお話、どうもありがとうございました。

完

盛中国、瀬田裕子ご夫妻

日中音楽交流の半世紀
ピアニスト 瀬田裕子さん に聞く（聞き手 谷野作太郎 元駐中国大使）

2025年9月30日　発行

編集・発行　公益財団法人日中友好会館
112-0004 東京都文京区後楽1丁目5番3号
電話 03-3811-5317　FAX 03-3811-5263
https://www.jcfc.or.jp/